

---

# 俺と彼女とあの日の約束（仮）

アシェーリト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と彼女とあの日の約束（仮）

### 【Nコード】

N6326X

### 【作者名】

アシーリト

### 【あらすじ】

6年前、俺は一人の少女に出逢う。

夕暮れに照らされ、金色に輝く向日葵の園の中で交わした約束。

俺はまだ 果たせずにいた。

これは、どこかで聞いたような。そして何処にでもあるような、そんな物語。

## 序章（前書き）

完全なオリジナルとしては初めての作品ですので、至らぬ事もある  
でしょうがお付き合い下さい。

## 序章

俺は、少女に手を引かれ走り回る。

向日葵が辺り一面を覆い尽くすその様は、照らす夕陽も相まってまるで金色の絨毯を思わせた。香る花の匂いに酔いそうになりながら、俺は手を引かれるままに彼女を追う。やがて俺たちは、開けた場所に出る。

「すげえ……」

思わずそんな言葉が零れる。

円形に開けたその場所からは、360度全てを金色の向日葵が覆い尽くしていた。子供ながらに、俺はその光景に魅入っていた。

「ねえ、『アキラ』」

少女が俺を呼ぶ。その声に振り向き　　今度こそ、言葉を失った。

落ちる夕陽を背に立つ、向日葵よりも尚美しい金色の髪の少女。呆ける俺をよそに、彼女はやわらかな笑みを浮かべた。

「約束して。いつか、いつかきつと

」

この光景を、俺は生涯忘れることはないだろう。

「有難う御座いました」

また一人、店をあとにした客に頭を下げながら挨拶をする。この一連の動作にも、もう随分と慣れたものだ。お世辞にも接客に向かない無愛想な俺にしてみれば、これは格段の進歩と言えるだろう。

レジカウンターを離れる前に、ザッと店内を見回す。元々それほど大きくはない店なので、店内の状況を把握する事は、それほど難しい事ではない。現に、テーブル席についているのは二組で計5人、どちらも常連さんだ。

(この分なら、あと10分もしないうちに帰るだろうな……)

テーブルに置かれている食事の残りの量から、大体のあたりを付ける。

そうしている間にも、体は思考とは別にしっかりと動いており、先ほど去った客の座っていたテーブル席、そこに置かれたままの食器類を腕に乗せている。この動作も、最初に比べて様になったものだと思うし、これが一番難しかったかもしれない。

今でも、当初何度か皿やらグラスやらを割ってしまった事を思い

出し、軽く自己嫌悪。

(さっさと運んで、出来る仕事を片付けておくか)

思いたつたらすぐ行動。特に、他にも来客が来る可能性がある以上、スピードと正確さは重要になってくる。従業員自体、俺とお袋。それと大学の帰りや暇な時間に時々手伝ってくれる姉しくないのだ。やる事はまだまだある。

テーブルを清潔な布巾で丁寧且つ素早く拭き、メニューやらの位置を整え、次の来客に備える。ついでにと、側を通ったときに頼まれた珈琲のおかわりを注ぐ。この常連さんたちは帰る前に、必ずコーヒーを一杯飲んでいく。これも、見慣れた光景だ。

「お会計3170円です」

「はいよ。御馳走さん。また明日来るよ」

お釣りを手渡した際に、笑顔でそう言ってくれる。最早見慣れた光景とはいえ、こうやって言ってもらえるのは素直に嬉しい。

だから俺は、この無愛想な顔で出来る限りの笑顔浮かべ、誠意を込める。

「はい、有難うございます。明日も美味しい珈琲、用意して置きますから」

常連さんを見送って、少し。この店の中には、俺と厨房で働いているお袋の二人しかいない。元々静かな店内は、すっかり静まりかえってしまった。その光景に、少しだけ。ほんの少しだけ、寂しさを覚えるのもまた、何時ものこと。

「……さつさと片さないとな」

そんな気持ちを、また明日訪れる常連さん。それと、まだこれから来るかもしれない客をもてなす事を思い浮かべ、思考を切り替える。

こんな俺でも、出来る限り最高の接客を。

なら、今は感傷に浸るのではなく、快適な空間を作ることに全力を注がなければ。一連の動作でテーブルの上を素早く片付けた俺は、ふう、と短く一息を吐いた、その時。

カロンカロン と、扉に付けられている鈴の音が鳴る。来店店の合図だ。

「いらっしやいま って、お前等。また来たのか」

勝手知ったると言った様子で入ってきた学生五人組み。この街の中では一応一番頭の良い学校に通っている男子二人、女子二人の彼等は、中学時代の俺の友人でもある。もう一人の女子は 見覚えが無いな。

「何よ。随分と失礼な言い方ね」

「そうだぜー。一応、俺達は今客なんだからな」

そう言って文句を垂れてくるのは、黒髪をそこそこ伸ばしツンツンにはねさせる、活発な印象を与える二枚目の『楠 明良<sup>アキラ</sup>』。身長は168と大きくも無く小さすぎるわけでも無い。若干気にしてい

るらしい。そして、肩ほどまで伸びる茶髪を後ろで小さくポニーテールに纏めるこれまた活発な印象を与える少女『飯塚 茜』。この面子の中では小学生から一番長い付き合いになる、所謂幼馴染というやつだ。

「もう、二人とも失礼だよ」

「毎度の事とはいえ、スマンな。『ジン』さん」

そういつて苦笑を浮かべるのは、残る二人。明良とは对象的に、少し長めの黒髪にメガネをかけた理知的な雰囲気を与える『服部 琢磨』。明良よりも背は高く、大体175くらいはあるだろうか。その隣にいるのは、この面子の中では一番背の低い『西條 美耶子』。腰の辺りまで伸ばしたストレートの黒髪に大きな瞳をした少しおっとりとした少女。彼女は中学の頃、明良と琢磨が所属していたサッカー部のマネージャーを務めていた縁で知り合った。

初めの頃こそ、その性格の違いから反発しあっていたようだが、サッカーを通して次第に親しい仲に。プレーでチームの中心になる明良と、的確な判断で司令塔となる琢磨のコンビは、なかなかのものだった。今では、琢磨と美耶子の二人は、若干感情的になりやすい明良と茜のストッパー役が、すっかり板についている。ついでに言うと、琢磨と美耶子は付き合っていたりする。……リア充め。

「いいさ。何時ものことだし、気にしてない。それより 後  
るの彼女は？」

先ほどからキョロキョロと店内を物珍しそうに見ている少女。その顔は良く窺えない。

「おお、そうだった！」

ポンツと手を叩く明良を見て、思わず溜め息を吐きそうになる。コイツは時々どこまでが本気が分からないから、今も忘れていたのかどうか、正直判断を付け難い。

そんな明良を放置して、琢磨と美耶子が説明してくれた。

「実は今日、内のクラスに転校生が来てな」

「折角だし、仲良くなるチャンスになるからって。それで連れて来たの」

なるほど、と相槌を打つ。しかし惜しい事をしたな。

「事前に伝えておいてくれたら、歓迎の準備の一つも出来たんだが……」

「あー、その手があったかあ……」

あちゃー、と額に手を当てる茜。まあ、過ぎたことだし、な。

「とりあえず、このまま立ち話もなんだし、そろそろ紹介してくれないか？」

「おうつ。『クリス』、見てるとこ悪いがこっちきてくれ」

「ん、なあに？」

鈴の音が鳴るような、というのはいったいの言うのだろうか。

それほど高く澄んだ声で返した彼女が一步前へ出る。

俺は、その姿を一目見て言葉を失う。

日本人が染めたような色では決して出せない、艶やかな金髪を腰よりも少し短い位の位置まで伸ばし、その先を赤いリボンで結っている。顔立ちも非常に整っていて、小顔に大きな瞳、スツとした鼻筋、血色の良い唇をした掛け値無し的美少女。特に、瞳はアメジストを思わせる綺麗な薄紫で、吸い込まれるようだ。

「紹介するよ。彼女はクリステイナ＝ラグレーン。フランスからこっちに住んでる親戚のうちにきたんだと。クリス。こっちは『陣ノ原 燦』。俺等の親友で、ここの店員。俺等はジンさんって呼んでる」

「初めまして。私はクリステイナ＝ラグレーン。宜しく。クリスって呼んでね？」

彼女　クリスは眩しい笑顔を浮かべ、手を差し伸べてくれる。だが、俺はほんの一瞬だけその手を掴むのを躊躇ってしまう。

彼女の声が。笑顔が。その仕草が。俺の、恐らく初恋の少女に、あまりにも似ていたから。チクリ、と胸の奥が疼く様な気がした。

「……陣ノ原燦だ。俺のことはジンで構わない。宜しく、クリス」

逡巡も束の間。俺は、この感情を読み取られないように、出来る限りの笑顔でその手を握り返した。

## 序章（後書き）

感想・指摘等宜しくお願いします。

10/18 最後の方を僅かですが改訂しました。

## 一話（前書き）

前回から一週間ほど過ぎた頃の話です。

## 一話

時刻は五時を少し過ぎた頃。五月に入ってから少し経ったとはいえ、未だ早朝の肌寒さは抜けそうもない。朝露に濡れる草花も少ない中、川沿いの道を俺は走る。

中学の頃からの習慣である早朝ランニングを、中学卒業後も毎日続けている。こうして走ることは、俺にとってはもう意味をなさないこと。そのはずだった。

けれど、今の俺にとってこうして目的もなくただただ走ることは、それ自体が意味のある行為になっていた。

何かに悩んだとき、自分の中で感情をもてあましそうになった時。こうして息が切れるまで走ることで、俺は自然とそういった悩みが晴れていくことを感じていた。勿論、そういったストレス解消のためにも走っている訳ではないのだが。しかし、ここ一週間ほどは訳が違い、中々解消出来ない悩みをかかえたまま、けれども明確な答えを出せないでいる。

そうして、息も切れるほどにたっぷりと走り込み、腕時計にちらりと視線をやれば、既に時刻は五時半頃。軽く流しながら、俺は家路を目指す。

今日も又、悩みは晴れないままだった。

俺こと陣ノ原燦あひらが住む星群市ほしぐむは、それなりに近くに海が、隣接する市には山がある、自然を残しつつも近代化の煽りをしっかりと受けている市だ。その証拠として、嘗て広がっていた一部の田畑は殆どがなりを潜めており、開拓されている。これは、第二次大戦後の高度経済成長が背景にある。

こうして開拓された場所を”新市街地”、今も変わらず昔の趣を残している街並みを”旧市街地”と名目上は呼んでいるが、かといって双方にいざこざがあるわけでもなく、概ね関係は良好と言える。もっともこの背景に、海が近いことを生かした水族館の建設、隣接する夕暮市に大型の遊園地が建設されたことによる観光客増加による恩恵があるのだが、殆どの市民にとっては大した争いがなければそれでいい、自然の景観を損なわない程度なら街が潤えばまたそれもよし、程度の認識でしかなかった。

さて。そんな星群市で生活している俺の家は、限りなく旧市街地よりの新市街地と隣接する場所にあつたりするため、旧市街の住民からは慣れ親しんだ場所として。新市街の住民からは図らずも隠れた名店的な存在として、それなりに忙しい毎日を送っている。

時刻は六時と少し過ぎ。自宅へと戻った俺は、庭先で軽くストレッチをしたあと、シャワーを浴びる。

熱いシャワーの湯が、僅かばかりべつついた肌に心地よい。

黒のチノパンと清潔な白のワイシャツに着替えたあと、リビングへと向かう。ヤカンを水をくべ火にかけ、冷蔵庫の中から、昨夜のうちを用意しておいたBLTサンドで軽く腹を満たす。シャキシャキと触感のいいキャベツの歯ごたえと、トマトの果汁にベーコンの香りと味が口内にフワリと広がる。簡単なものとは言え、我ながら良いできだと感心する。

三切れほどを腹に収めた頃に、ちょうど良くお湯が沸く。コーヒーマーカーに自分でひいた珈琲豆を用意し、お湯を注いでいく。そうして珈琲が出来上がるまでの間に、一日の流れを確認しておく。

予約客の有無や珈琲豆、食材の在庫の確認。そうこうしている間に出来上がった珈琲を淹れる。それらを一通り済ませ、続いて新聞を手取る。少し前に姉から、珈琲を飲みながら新聞を読むなど傍から見れば出勤前のサラリーマンなのだが、何故かその様子が異様に様になっている。アンタ本当に16歳か？などと呆れ半分に言われたのだが、何だか納得がいかない。第一、姉の言うように俺はまだ16でそこまで老け込んだ覚えは無い。

ちらりと壁にかけてある時計に目を向ければ、時刻は六時三十五分を指している。カップに残った珈琲を一息に飲みこみ、後片付けをしたのちに、身支度を済ませ家をあとする。向かう先は当然、喫茶店だ。

我が家から100mもしないで辿り着ける、喫茶『air ed e repos』。それが我が陣ノ原家が経営する喫茶店の名前だ。フランス語で書かれたこの店名は、直訳すると意味は日本語で『休憩所』を表すのだが、今は亡き親父は『安らぎの場所』という名で看板を出した。

元々は俺の父方の祖父が営業を始めた喫茶店がベースとなっており、イギリスやフランスなど諸外国で本場の経験を積んだ父が後にリフォームし、現在の形に落ち着いている。

そんな店の外観は、少し大きめのログハウスを思わせる木造建築。扉は取っ手から窓枠まで木製で出来ており、一見古ぼったい印象を与えるも、内装は洒落た造りになっていて、何処か懐かしい雰囲気漂わせている。

店内には最大四人掛けのテーブル席が6つに、カウンター席が6つ。テーブル席のほうは非固定式なので、団体客がきた場合席を合わせる事が出来るようになってる。

ちなみに明良たちが来店したときも、当然のように席を移動させて思い思いに寛いでいる。

正面の入り口の鍵を開け、店内に入る。カロンカロン、と鈴の音が静まり返った店内に響く。次いで、窓を開き新鮮な空気を取り込む。室内に響く鈴の音と、フワリと吹き抜ける風が肌に心地よい。

この、誰もいない静まり返った時間が、俺の密かなお気に入りだったりもする。だがそれも、あと十分もしないうちにぶち壊されるだろう。別にそれが嫌いな訳では無いのだが、そう思うと何時もの事とはいえ少しだけ気落ちする。

気持ちを切り替え、俺は愛用の黒いエプロンを着用し、手を丁寧に洗う。続いて、清潔な布巾でカウンター席を丁寧に拭く。続いて、食器棚から五つのカップとコースターを用意する。他のカップと違い、同じ食器棚の中に入ってはいるが、専用と分かるように仕切りで区別してあるそれらを、さっと水で洗う。

次に、家でさきほどもやったように、ヤカンに水をくべ火にかける。そうしている間に、キッチンとカウンターに幾つかの珈琲豆と紅茶の茶葉、冷蔵庫からは罎屑になっている近くのパン屋で買った普通の食パンとライ麦の食パン。それからベーコン、レタス、タマゴ、トマトなどの具材を幾つか取り出す。

普通の食パンのほうは、パンのみみを切り取る。ライ麦パンのほうは、本人達の要望でそのままに。それから素早くマーガリンを塗る。冷水で野菜をさっと洗い流し、レタスは手でちぎっていく。この時は、それほど小さくしなくてもいいのが、俺流だ。そのまま同様にベーコン、トマトを切り、タマゴは溶いて置く。

俺は何時ものように、ベーコン、レタス、タマゴのBLTサンドから作ることにする。溶いたタマゴを油を適量ひいたフライパンで手早く焼いていく。そうして出来るのは、半熟のスクランブルエッグ。アツアツのそれをレタスやベーコンと一緒に丁寧に挟み、パンで閉じたあとは、食べやすい大きさにする為に四等分にする。

具がこぼれないようにするので、なかなか力加減が難しい。これも、最初の頃は何度も失敗をしたものだ。もともと、今では手馴れ

たものだが。

続いて、トマトを入れたライ麦パンのBLTサンドに取り掛かる。トマトとタマゴの二種類にしているのも、パンの味の違いから組み合わせを変えたほうが味が引き立つからだ。まあ、要望があれば変えることも当然あるのだが。

さきほどと同じような手順で準備を進め、ライ麦パンのBLTサンドも出来上がった。三セット出来たそれを四等分にするので、合わせて二十四個。小さいとはいえ、これならば多少は腹の足しになるだろう、と考えていた時。

カロンカロン、と来店を告げる鈴の音が鳴る。……どうやら時間に間に合ったようだ。

「ようし、一番乗りい！」

「ああ！？また先越されたあ……」

まだ時間は六時四十分ほどだというのに、やたらと元気のある声で入ってきたのは明良だ。続いて、やや気落ちしたような声で入ってくるのが茜だ。この二人は何時の頃からか、こうやってどちらが最初に来店するかを競っているらしく、今のところ勝率は明良に分配が上がっている。二人はじゃれあいながら、カウンター席に座る。

「なんとというか……」

「毎度毎度申し訳ありません」

そんな二人のあとに、呆れたように額に手をあてている琢磨と、申し訳なさそうに苦笑する美耶子。こっちの二人は毎度明良と茜（馬鹿二人）を抑える役に回っているのだが、どうやらこの朝の恒例

行事ばかりは止められないらしい。まあ、無理もないだろう。これもまた、いつもの光景だ。ただ、ほんの少しだが、しかし大きな変化が訪れた。

「二人が謝ることじゃないさ。それと……おはよう、クリスマス。やっぱりまだ慣れないか？」

最後に、少しばかり呆然とした様子で入ってくるのは転校生のクリステイナことクリス。彼女がこうして朝の恒例行事につきあうようになってから既に一週間は経つのだが、まだ明良と茜（馬鹿二人）のハイテンションにはついていけないようだ。

「あ、あはは……。おはよう、ジンさん。まだちょっと、ね」

あの日以来、彼女はこうして四人とつるんでこの店を訪れるようになった。普通の高校生ならば、漸く朝食を終えるか身支度を終えているかの時間帯のため、初めの三日ほどまでは、彼女は重い瞼を擦るようにして四人の後をついてきたものだ。

だがそれも少しはマシになってきたのか、多少寝むそうにはしているものの慣れ親しんだように、琢磨と美耶子に続いてカウンター席へと腰を落ち着ける。

「それでも、最初に比べれば大分マシになったほうじゃないか？ 初日みたいに目を擦ってないし」

「も、もうっ。恥ずかしいんだから、もう忘れてよね？」

そう指摘すると、彼女は僅かに頬を朱に染め、ツンと顔を逸らす。時々こうして初日のことをネタにからかうのも、そんな彼女に謝罪の意味を込めて紅茶を淹れるのもまた、今の俺達の日常となってい

る。

「お詫び、って訳じゃないんだが……。アレ、用意が出来たよ」

「ほ、本当っ？」

御機嫌斜めな彼女の機嫌を取るため、ではないが、俺はふと話題を切り替える。すると先ほどまでの不機嫌さはどこへやら。どこか期待に満ちた表情を向けてくる。そんな彼女を宥めながら、俺は五人の目の前のカウンターにそれぞれコースターとカップを置いて行く。

純白の側面と縁に金の装飾があしらわれたティーカップ。その小洒落たカップの持ち手の部分が、それぞれ異なる色の装飾が施されている。

明良、茜、クリス、美耶子、琢磨の順に、紺、赤、紫、青、緑の色で並んでいるそれらは、彼等専用のカップであることを表す証。それは、コースターも同様だ。

彼女が待ち望んでいたのは、自分専用のティーカップだ。初めてこの店を訪れたその時、クリスは自分が使っている物と明良たちが使っている物が僅かに違うことに気付いた。そして理由を話すと、何処か物欲しそうな表情をするので、こうして彼女専用のカップを用意する事となった。

専用、といっても、これは元々ウチで扱っているカップに俺が少しだけ手を加えたものだ。その昔、俺は祖父からちよっとした細工や彫刻の扱いの手ほどきを受けた事があり、それを知った茜がせがんできたのが、そもその始まり。

持ち手の部分の縁を僅かに削り、塗料で色づけを繰り返す。仕事

の関係もあるので、一つ出来上がるのに大体一週間くらいかかるそれを、俺は少しばかりの徹夜をすることで四日に短縮させた。

「カップの底も見てみるといい」

にやけそうになる顔を必死で堪えている彼女に、やんわりと促す。まるで、というか割れ物を扱うような手つきでカップを手を取った彼女は、その底を見てあつと小さな声を漏らす。

「これって……」

「クリスの頭文字を刻んだ」

「俺達のもな。ホレ」

そういつて笑う明良に続き各々カップを持ち上げると、それぞれの色でイニシャルが刻まれている。コイツ等を作るのに二日貫徹させられたのは良い思い出だ。そう思わないとやってられんだけなのだが。

そうして暫くしげしげとカップを見つめていたクリスは、やがて満面の笑みを浮かべる。花が咲くような笑み、というのはこういうのをいうのだろうな、などと柄にも無い事を頭の隅で考えた。

「ありがとう、ジンさん。凄く嬉しいよ!」

……まあ、この笑顔が見ただけでも徹夜をした価値があるというものだ。



## 一話（後書き）

感想・指摘等お待ちしております。

10/24 一部修正をしました。

・俺は五人の目の前にそれぞれコースターとカップを置いて行く。

・俺は五人の【目の前のカウンターに】それぞれコースターとカップを置いて行く。

・最後の行の文頭に【……】を追加しました。

## 一話（前書き）

私のお茶知識は所詮にわかです。

## 二話

俺は、既に出来上がっているサンドウィッチをそれぞれ小分けして配ぜんする。それと同時に、一度クリスからカップを返してもらい、五つのカップに沸いたばかりのお湯を注ぐ。

そうしている間に、ちらりと時計に目をやる。五人が来店してから6分ほどが経っている。そろそろ頃合いだろう。

二つの透明のポットのうち、手前にあるほうを手取る。オレンジ色をしたそれはダーズリンティー。ストレートで飲むのに適しており、明良と茜はこれをよく好んで飲む。

カップを手に取り、静かに注いでいく。マスカットフレーバーの香るそれを、二人の前に差し出す。

続いて手に取るのは、澄んだ濃いめの紅色をしたアッサムティー。ミルクティーに適し癖の少ないこちらは、美耶子とクリスのお気に入りだ。こちらと同じように二人に差し出した。勿論、好みの量を入れられる様に、ミルクをつけるのも忘れない。

本当なら、紅茶は自分の好みの茶葉の量と抽出時間でこそ、美味しく感じる。簡単にいえば、自分の好み時間、茶葉の量で淹れ、好みの飲み方のほうがその人にとって最も上手い紅茶になる。だからこの五人には自分で淹れてほしいと思っっているんだが、面倒なのかそれとも多少の本音があるのかは分らんが、俺の淹れたもののほうがいいと言ってくれる。こう言われてしまえば、こちらとしてもそれ以上強く言い出すことはできないしな。

ちなみに琢磨はその日の気分で飲むものを変える。今日は珈琲の気分らしく、俺自身も飲むつもりだったので、紅茶と並行してマキ

ネットで準備をしていたブルーマウンテンを用意した。琢磨のものには小さじ一杯分の砂糖を。俺はブラックのまままで飲むのも、互いに理解しているところだ。

こうして、僅かな時間ながらも朝の時間を楽しむのが、俺たちの日常だ。

そもそもこんな朝早くに彼等が訪れるのには、明確な理由があったことだ。

青春を謳歌する高校生の例に漏れず、彼等は部活に精を出している。とどのつまり、朝練に向かうのだ。そして、運動に差し支えない程度に腹を満たすために、四人が通う星群第一高校に比較的近い位置に立地している我が喫茶へと、足を運ぶ。つまりはそういうことだ。そして当然の事ながら、先ほどまで作っていたサンドウィッチは、彼等のために用意したものと言うわけである。

因みに現在の時間は6時55分。ここから学校まではだいたい10分くらいかかるので、そろそろ頃合だ。もともとそれほど量を作っていないかったことと成長期であることから、ペロリと平らげってしまった五人は、席を立つ。

「じつそさん！今日も美味かったぜ、ジンさん」

明良がパンツ、と手を合わせて礼を言う。他の四人も同じように口々に礼を言う中、茜が何かを思い出した様に声をあげ、明良達に先に行くように声をかけた。

「あ、そうそう。ねえ燦、今週の日曜日って時間取れる？」

「……突然如何したんだ？」

訝しげに訪ねる燦に、茜はニカツと笑う。

「ほら。クリスつてば親御さんの転勤で日本に来た訳で、まだまだこのあたりに慣れていないじゃない？だ・か・ら。案内も兼ねて皆で遊びに行こうかなって！……ダメ？」

上目遣いに訪ねる茜に、燦は少しだけ思案する。

「正直、突然のことだから即答は出来ないが……。一応お袋に相談してみる。どうせ日曜日のこの辺りは、殆ど客なんてこないし、なとりあえず、後で連絡いれる」

「え。何よ、随分曖昧な返事ねー……うわっ」

「これでも真剣に考えてるんだ。一応姉貴にも話してみるから、勘弁してくれ。それと、もう行かないと朝練間に合わなくなるぞ？」

ブツブツ文句を言う茜を宥めるように、燦は彼女の頭をワシヤワシヤと撫でる。一頻り撫でた後、時間を告げる事で茜が更に文句を

言う暇を失くす。これも、良くある光景だ。

「やっぱ！あーもー、髪もグシャグシャだし！これで遅れたら燦のせいだからね！」

「はいはい」

「何よその態度！つて、ああ！？と、兎に角、おばさんにちゃんと聞いておいてよね！それと、帰りに寄るからそんな時になんか奢る事！」

プリプリ怒る茜の態度がひどく子供っぽく見え、思わず燦は笑みを零す。その表情は、仲の良い五人の前でも滅多に見せる事の無い、柔らかな笑み。

「分かった分かった。　　気をつけてな。それと勉強頑張れよ」

「　　うん！行ってきます！燦も頑張ってるね！」

それが何だか堪らなく嬉しくて。茜は最高の笑みを返すことで答えた。

茜が店を出て、シンと静まり返った店内に鈴の音が響く。先ほど

までの賑やかさが嘘のような、まるで世界に自分独りしかいないようなその空間で、燦はそれまでであった時の余韻に浸る。

「片付け、するか……」

少しして、時間を取り戻したかのように燦が動き始める。燦はカウンターの奥へ向かうと、備え付けられている古びたレコードを回し始める。これは、燦の祖父が開店当初に用意したものだ。

音楽などトンと詳しく無い燦ではあるが、幼い頃から祖父に良くクラシックを聞かせてもらっていたために、今でもこの店ではレコードで音楽を流している。

流れるのは、彼のお気に入りの一つである、パッヘルベルの【カノン】。

店内を優しいヴァイオリンの音が満たす中、先ほどまで明良達が使っていた皿やカップを、丁寧に下げていく。決して傷つけないよう、丁寧にカップを洗い、水で泡を流していく。

テーブルを拭き、茶葉や豆、食材の確認を再び済ませる。

この店の本来の開店時間は10時から。母がこちらに来るのは、9時半頃。それまでの時間、誰も邪魔されないうまま静かな時間を過ごす。

こうして今日も又、新しい一日が始まっていく。

## 二話（後書き）

パツヘルベルの【カノン】は、個人的に好きだからです。すみませ  
んwww

感想・指摘等お待ちしております。

## 豆知識的なもの

・マキネッタ 直火用のエスプレッソマシーン

イタリアなどの国では一般家庭で使われるような小道具。加熱さ  
れた水が発生させる蒸気を利用して、豆から珈琲を抽出する、とい  
う仕組みになっています。

結構小さいです。

・ブルーマウンテン

ブルーマウンテン山脈の標高800 1200mの間の限定された  
場所から取れたものをさします。

その香りは高く繊細な味わい。その香りの強さから、香りの弱い他  
の豆とブレンドされることが多いです。

実は日本に輸入されるものの多くが、標高800m【以下】で取れ  
たものだったりします。本来、ブルマンと名づけられるべきではな  
い豆なのに。本来のブルマンを国内で出す場合、1kg当たりで5  
〜10万もする高級品だったりー。

実は燦が琢磨に出しているのは、800m以下のほう。高校生が飲

むのに、正真正銘のブルマンは高すぎるのでwww勿論、琢磨はそのことを知っています。でも他のお客は知らないよ。

・ダージリン (Darjeeling)

北インド産。お茶の色：オレンジ色 ストレート向き。マスカットフレーバーと呼ばれる独特の香りが特徴、専門店では茶園ごとに売られています。

・アッサム (Assam)

北インド産。澄んだ濃いめの紅色。ミルクティーに最適。くせが少ないので、飲みやすいと思います。

## 三話（前書き）

主人公の母、登場です。

### 三話

それは、クリスを案内することを聞いた次の日の事だった。

「それじゃあ、すぐに戻ってくるから」

「うん。燦ちゃん、急ぎすぎて怪我とかしないようにね？」

エプロンを脱いだ俺は、調理場で料理を準備しているお袋に一声かける。申し訳無さそうに声をかける俺に、お袋はやんわりと、それでいてどこか含みのある笑みを浮かべた。それが、様になっているのだから困る。

俺のお袋 陣ノ原 愛莉は、どういいうわけか見た目が20代で通じそうなくらい若く見える。既に40代を越える二児の母であるにも関わらず、だ。更に言ってしまうと、この見た目20代の母親は、この店の看板『娘』としてそれなりに人気がある。娘と言う歳ではないのに。

理由として、背丈が150と少し程度しかなく、茶色っぽいセミロングのフワフワした髪、小顔で可愛い顔立ちに垂れ目気味な大きな瞳、ついでに特筆したくは無いが体格のわりに胸がでかいことが人気に拍車をかけている。一部でいう、ロリ巨乳というやつだ。どこか天然気質の可愛い、見た目20代のロリ巨乳。

これは、身内鼻屑でもなんでも無い。ただ単なる事実として、認められていることだ。……個人的には認めたくないのだが。

このどこかポワポワしている俺のお袋は、体が弱い。それも、俺を生むこと自体が結構危険だった程に、だ。それでも俺を生んだお袋は、それ以降体調を崩しがちになっている。今は大分落ち着いてきてはいるが、それでも長時間労働は避けたい。

親父がいない今、俺が高校進学をやめて店を継ぐことを決めた理由の一つでもある事は、否定出来ない。

だが、それは罪滅ぼしとかそういう理由では無い。全くない、とは言えないのかもしれないが、それでも、俺自身この店が好きだったことが何よりの理由であることは胸を張って言えることだ。だから俺は、この選択に後悔はしていない。

小さな包みと水筒を持ち上げた俺は、振り返り声をかける。

「言われなくてもそうする。……それよか、良い加減『ちゃん』付けは止めてくれ。……それと、無茶しない事。少しでも気分が悪くなったら、連絡しろよ」

「はい」

と、満面の笑顔で答えるお袋。全く反省の色の見えないその答えに、俺は小さく溜め息を吐く。本来なら、そういった態度や返事の仕方すら止めてほしい。何故ならこの母親、こういったことを客がいる時でも度々やってしまうからだ。それ故に、見た目20代の口り巨乳の母親目当てでこの店に来る客も少なくはない。一々そういった手合いを相手取るのは、それはもう面倒なのだ。

何より、16にもなって『ちゃん』付けは死にたくなる。

「俺達がついてっから、安心していつてきな」

「そうそう。悪い虫がつかねえように見張ってるからさ」

そういつて声をかけてくれるのは、常連のじいさんやおっさん達。この人達もお袋目当てで来ているふしがあるものの、それ以上にこの店の味を愛してくれている人達だ。なにより、爺さんや親父の代からこの店に通ってくれている、かえがたい理解者達。

だからこそ、チャカすような言葉をかけられてもも信頼をおける。この人達がいてくれれば、ちょっとは大丈夫だと。

「そんじゃあ、行ってくる」

苦笑を零した俺は、裏口から店をあとにした。

ガチャリと、しつかりと裏口に鍵をかけた俺は、停めてある自転車に跨る。時刻は午前11時30分。昼時のピークに入り始めた頃。

勢い良くペダルを踏み込む。目指す場所は、星群第一高校。

そもそも事の始まりは、一本の電話からだった。

「……………は？」

開店から一時間後の、午前10時半頃。そこそこ客入りが良くなり始めた頃に、突如茜からの電話がはいる。が、その内容を聞いて、素っ頓狂な声をあげてしまう。

『だーかーらー！お弁当忘れてきちゃったから代わりに作って持っ

てきて、って言ってるの』

「……おばさんに持ってきてもらえばいいじゃねえか」

さも当然のように言う茜に、呆れと共に言い返す。が

『私だってそれが出来ればそうするわよ。でも、今日から三日、お父さんと一緒に旅行に行くって言ったの忘れちゃって……。だからお弁当も作ってなくて……。』

「学食で食べばいいだろ」

『今月ピンチなのよお。だからお願い!』

電話越しに頭を下げている茜の姿が思い浮かぶ。正直、これからがピークの時間帯であること、それと学校という場所に近づくこと自体が俺にとって躊躇われる。俺はもう一度断ろうとして。

「こっちは大丈夫だから。燦ちゃん、行ってきなさい」

「お袋……」

と、お袋に遮られた。表情はいつもと同じように、だけど視線だけがいつもと違っていた。

「分かってて言ってるだろ……」

「うん。それでも、行ってきなさいな」

お袋は、個人的な感傷で俺が学校という場所に近づこうとしない

ことを知っている。それを、恐らくは自分のせいだなどとお袋は考えているのだろう。こうなると、行かないわけにはいかない、な…。

「 分かった。適当に何か作って持って行ってやるから」

『 ホント！？ 』

「 ああ。中身は文句を言うなよ」

『 もち！それじゃあ校門前に着いたら連絡頂戴！ 』

「 ああ、分かった」

携帯を閉じ、溜息をひとつ。気は進まないがやるしかない。だがそこで、ふと考える。

「 なあ、お袋……」

「 なあに？」

「 女子の弁当って、何入れりゃいいんだ？」

そう問いかけた時のお袋の何とも言えない表情は、暫く忘れられそうもない。

「 はあ〜。これでお昼は何とかなりそう」

茜は携帯を閉じてほっと一息吐く。一時はどうなるかと焦りを感じていたのだが、やっぱり持つべきものは幼馴染ね、と考えていた。中身に関しても、彼女は特に心配はない。燦の料理の腕前は、昔から知っていて折り紙つきだからだ。

「お帰り、茜」

「おー、どうだったよ？」

教室に戻ってきた茜を出迎えてくれたのは、同じクラスの明良達。次の授業前の休み時間のためか、のんびりしている。茜はごく自然にその輪の中へと溶け込む。茜を含め五人で輪を作るのは、彼等にとつて既に声をかけるまでも無いほどに当たり前になっていた。

「うん、バッチリ。燦、作ってきてくれるって」

「良かったね、茜ちゃん」

「うん！」

美耶子の言葉に、茜は笑顔で答える。そんな彼女は、どんなお弁当にしてくれるのだろう、と期待に胸が膨らませている。燦のお弁当が食べられると思うだけで、午後の授業は十分に乗り切れそうだななどと現金な考えを浮かべていた。そんな茜を見ていた明良は、意地悪い笑みを浮かべる。

「しかしお前もそっかしいというか、抜けてるっていうか……」

「あ、アキ五月蠅い！もう、余計なお世話だよ」

クツクツと笑いを浮かべる明良。自業自得とはいえ、何処となく気恥ずかしさを覚えた彼女は、プイと顔を背ける。そんな二人を見て、琢磨がううむと唸る。

「だが、ジンさんの弁当が食べられるのは羨ましいな」

「あゝ、それは言ってるわ。俺も今度頼んでみるかな。つーか茜、お前少し分けてくれよ」

琢磨の発現に便乗した明良だったが、茜は両手を胸の前でクロスさせ、バツテンを作った。

「イヤ！ 燦のお弁当はボクのものなんだから！ アキにあげる分はありませ〜ん。あ、でも、美耶子とクリスには分けてあげるから」

「ふふ、有難う」

「本当？ 嬉しいなあ」

「うわ、ケチくせえ！ 男女差別はんたーい」

愚痴る明良を半ば無視して二人に声をかける。随分前から味を知って美耶子と、最近その味を知り始めたクリスの二人は、喜色満面といった様子だった。

「あ、そういえば」

と、何かを思い出したかのような様子のクリスは、茜に向き合う。

「皆は明良のことを名前で呼ぶのに、どうして茜は『アキ』って呼

「んでのん？」

右手の人差し指を顎の辺りに当てながら可愛らしく小首を傾げたクリス。その一つ一つの動作がとても絵になっているなあと思いつつ、ああなるほどと茜は一人得心がいった。チラリと時計を見る。幸い、休み時間終了までには、ほんの少し時間が残っている。

「ほら、前にも話したと思うけど。そもそも私と燦　ジンさんは所謂幼馴染っていうやつでね、幼稚園位からの付き合いなんだ。家も近い事もあって、このメンバーの中じゃ一番付き合いは長いかな。で、小学校に上がってアキと知りあったの。ボクは昔からジンさんの事を燦、って呼んでいたからそのまま名前で呼んで、アキとは名前が一緒だからあだ名で呼んでいるってわけ」

「そんでそれから一緒につるむようになってな。中学からは琢磨と美耶子とも知り合うようになってな。それからだよ。俺等五人で行動するようになったのって」

「へえ、そうだったんだ。……ん？」

そこまで話し終わると、再び考え込むクリス。だが先ほどとは違い、何処か困惑している様子だった。

「どうしたのクリスちゃん？」

見かねた美耶子が優しく訪ねると、クリスはおずおずといった感じで口を開いた。

「えっと……。もしかしてジンさんって、私達と同年……？」

「ああ、そうだが」

「え、えええっ！？皆『さん』付けしてるし、大人びた雰囲気だったから年上だと思ってたよ！」

躊躇いがちに言葉を紡ぐクリスに、何を今更といった感じに答える琢磨。するとクリスはこれでもかというくらいに驚いた。そしてすぐにオロオロとしはじめる。

「ど、どうしよう。もしかして、態度にでちゃってたかな？」

その言葉に、四人は「ああ、なるほど……」と考えがシンクロした。何に対してそこまで気にしているのかと思えば、そんなことがそう思い明良と茜が彼女を落ち着かせる。

「あゝ、気にすんなって。どうせアイツも、そんな細かいことでどうこういうような奴じゃねえし」

「だね〜」

「そ、そうかな？」

「おう。そもそも『ジンさん』って呼ばれるようになった理由が、小学生の時のクラスの連中が言った、『なんか兄ちゃんみたいなやつだなあ』から始まって、最終的に『さん』付けに落ち着く形になったからなあ」

二人の言葉を聞いて安心したのか、ホッと一安心した様子のクリス。そこで丁度、タイミングを見計らっていたかのように始業のチャイムが鳴り響いた。それと同時に教師が入ってきたので、そこで

一度話はお開きとなった。

やがて席についた彼等は、他のクラスメイト達と同じように授業を受ける体勢に入る。次の授業は古典の時間だ。

初老の男性教師の授業が始まりを告げる。外国人ということもあり苦手意識のある古典の授業を受けていたクリスは、やがてふと疑問を思い浮かべた。

（そういえば、ジンさんが同い年なら　　どうして学校に通っていないんだろう？）

何気なく疑問に思った彼女だったが、すぐに思考の奥底へと埋没していく。今は少しでも、この難敵（難敵）を乗り越えられるように集中しなければ。

### 三話（後書き）

主人公は性格や目付き、背丈は父親似。それ以外は大体母親似です。

感想・指摘等お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6326x/>

---

俺と彼女とあの日の約束（仮）

2011年11月10日09時35分発行